すみだ地域学情報 We!

第56号
2021年
（令和３年）
４月発行

発行：墨田区（地域活動推進課）
〒130-8640　墨田区吾妻橋一丁目23番20号
☎03-5608-6202　FAX 03-5608-6934
✉KATSUDOSUISHIN@city.sumida.lg.jp

つながる墨田区

おもてなしの心をまなぶ

本号は、「すみだを訪れる方々を『おもてなしの心』でお迎えする」というWe！のコンセプトに基づき、公益社団法人マナーキッズ®プロジェクトの理事であり、小笠原流礼法の的伝総師範である鈴木万亀子氏に、おもてなしの心について、紙面上でご指南をいただきました。鈴木総師範は、当該法人にてマナー指導をされているほか、時代劇映画等で所作指導もされています。

＊　＊　＊　＊　＊

■おもてなしの心とは

我が国でのオリンピック・パラリンピック開催決定を機に〝おもてなし〟という言葉が脚光を浴びました。この〝おもてなし〟の心が、日本に古来より伝承されている小笠原流礼法そのものなのです。その真髄（しんずい）は「常に相手に対する思いやりの心」です。

■武士の在り方からまなぶ

小笠原流礼法の古文書をひもといたことがあります。そこに次のような文章を見た時、非常に驚きました。

―いかに敵の首といえども、血のりをぬぐい、薄化粧をほどこし、髪をなでつけ、真新しい白の絹でつつむべし。―

首実検のくだりには、憎さではなく、命に対する尊厳の心が読み取れます。

また、「醜くあるべからず」という武士の言葉があります。行動の醜さ、言葉遣いの醜さ、服装の醜さ等がありますが、最も重要なのは、心の中の醜さです。年をとるに従い、心の状態が顔に出ると言います。年をとるに従っていい顔になるためにも、心の醜さに気をつけて欲しいと思います。

■日本人の真の姿

百数十年前、我が国を訪れた外国人が次のように航海日誌に書き記しています。

―日本人は貧しくとも、正直で、勤勉で、道徳心を持ち、礼儀をこころえ、親切で心優しい民族である。ここに、私は、日本人としての品格を感じる―

これが、日本人の真の姿です。日本人であるというプライドを持って頂きたいと思います。

少し前の時代では、西洋文化にあこがれを持ち、それに近づこうとする傾向があった様に思われますが、今やっと忘れかけていた日本文化が見直されつつある様です。日本人のあたたかな心からの〝おもてなし〟は、何ものにもかえがたいものです。

■心からの〝おもてなし〟

その基本として、相手を敬った形、動き、目付き、手の表現、また、食事の時の箸を取り上げ、置くタイミング、食器、蓋の扱い等々、折々の姿勢や挨拶を、日本のしきたりの基本をまじえながらお伝えしていきたいと思っています。

ここでは、日本の伝統的な品格のある正しい姿勢、お辞儀・挨拶の仕方をご紹介しますので、是非身に付けて下さい。

まず、足を揃えて真っ直ぐ立ち、次に、丹田（たんでん）に力を入れ、胸を開きます。やさしい顔で相手を見、「よろしくお願いします」と言葉を発してから、心を下げるつもりで腰を折ってお辞儀をし、その後にまた相手の目をやさしく見ます。これを残心と言います。（頭を下げると言いますが、頭を下げて首筋を相手に見せることは、昔悪事を働いた人が代官所で「悪いことをしました。」と言って頭を下げることで、小笠原流礼法では避けるべき仕草と言われておりますので、留意して下さい。）

伝統的な日本らしい暮らしや当たり前に受け継いできた文化が継承できなくなりつつある現代社会の中でも、墨田区はものづくりの街として伝統技術や文化が色濃く残る場所です。地域のお祭りなども盛んで、子どもたちが日本人として生まれてきてよかったと実感できる場所でもあります。そのような墨田区から、〝おもてなしの心〟の第一歩として、この挨拶を全国に発信して欲しいと思います。

（小笠原流礼法
的伝総師範　鈴木　万亀子）

隅田川とレガッタ

すみだ郷土文化資料館
レガッタ展でのオール展示

■隅田川とレガッタの歴史

レガッタ（動力を使わないボートレース、競漕）は、幕末に日本に伝わり、長崎や横浜で外国人が始めました。今回は明治の前半期から、中断を経て今日まで続く隅田川とレガッタの歴史をご紹介します。

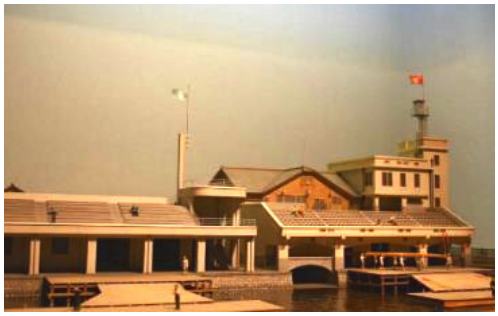
■隅田川での競漕会のはじまり

はじまりは、海軍の短艇（カッターボート）からでした。短艇は非常時の脱出などに使われる手漕ぎの船です。明治15年（１８８２）、隅田川で海軍の短艇競漕会から行われました。この頃、築地や品川に海軍施設がありました。競漕会は、楽隊の演奏や桁渡り、各軍艦から出された道化船が滑稽な出し物を行うなど、娯楽的な要素も多いものでした。明治天皇もこの時と、明治16年（１８８３）、17年（１８８４）、29年（１８９６）と観戦し、コース沿いには多くの観客が押し寄せる盛況となりました。その後、海軍施設の移転もあり、行われなくなりました。

しかし、日中戦争下の昭和13年（１９３８）の海軍記念日から、海軍と民間合同のレースが復活し、太平洋戦争下の昭和17年（１９４２）には、１２０艇が参加した水上練成会（レース）が行われました。こうした歴史は、昭和16年（１９４１）に建てられ、現在も隅田公園に残る明治天皇海軍漕艇天覧玉座阯の碑（以下、聖蹟記念碑）が伝えています。

■関東のレガッタの中心地になる

明治16年（１８８３）、東京帝国大学（以下、東大）にボート部の前身ができ、まもなく隅田川で体操伝習所（筑波大学の前身の一つ）との対校レガッタが開催されました。明治20年（１８８７）には東大が向島に艇庫を作りました。その後、企業などでも対抗戦が行われました。隅田川には多くの艇庫が作られ、向島艇庫村と呼ばれるようになりました。東大と一橋大の艇庫（ボートを収める倉庫と観覧席を兼ねていた）は、現在の隅田公園少年野球場の北側に並んで建っていました。こうして隅田川は、レガッタの関東での中心地となりました。



すみだ郷土文化資料館　ジオラマ
左：東大艇庫　右：一橋大艇庫

■学生スポーツの隆盛、中断・復活から現代へ

明治後半から昭和戦前期は、学生スポーツが実力的にも娯楽としてもトップの位置にありました。隅田川で最も有名な対抗戦は早慶レガッタでしょう。第１回大会は明治38年（１９０５）に吾妻橋―東大艇庫間で行われ、一時中止を挟み、昭和５年（１９３０）に復活しました。その後戦争により、再び中断しました。

戦後すぐに、隅田川でのレガッタは復活しました。しかし、既に戸田漕艇場が開設されていたこと、隅田川の水質悪化の問題などにより、大学等の艇庫は隅田川から無くなっていきました。艇庫が無くなるのと合わせるように、隅田川周辺の景観も大きく変化しました。

早慶レガッタも、当初から隅田川を会場に行われていましたが、昭和36年（１９６１）以降、戸田や荒川が会場となりました。そして、昭和53年（１９７８）の第47回大会から、再び隅田川のコースに戻ってきました。その後、ウォーターフェア隅田川レガッタ（昭和56年～平成26年・１９８１～２０１４）の開催や区内学校のボート部の活躍など、墨田区とボートの歴史は続いています。

平成28年（２０１６）９月、聖蹟記念碑の隣に、隅田川ボート記念碑が建立されました。碑文は先日亡くなられた半藤一利さんが撰したものです。半藤さんは向島の出身、東大ボート部でも活動し、昭和27年（１９５２）全日本選手権のエイト（８人の漕ぎ手が各１本オールを持ち、１人の舵手と乗り組む）クルーの一人でした。

なお、すみだ郷土文化資料館では、４月10日からレガッタ展を予定しています。

（すみだ郷土文化資料館
学芸員　石橋　星志）

隅田川ボート記念碑